



外来生物の脅威

【オオフサモ】



オオフサモは、生態系や人間活動へ影響を及ぼす「日本の侵略的外来種ワースト100」のひとつ。温暖な気候を好む淡水性の水草で、湖沼・ため池・河川・水路などに生育します。現在は、ほぼ全世界に分布。日本には1920年頃に持ち込まれ、意図せず各地に拡散し、場所によっては水面全体を覆い尽くすほど大繁殖。やっかいな理由は、花が結実せずに生長、切れ藻から再生、無性的に繁殖、冬も枯れないなどが挙げられます。

米国では、有害雑草として販売を全面的に禁止している州もあるほど。日本では外来生物法によって「特定外来植物」に指定され、栽培や移動が一切禁止されています。北川湿原では家田川に繁殖。放置しておくとも希少植物の生育に大きな影響があるので、「家田の自然を守る会」などが、定期的に駆除作業を行っています。

【オランダガラシ(クレソン)】



オランダガラシ(和蘭芥子)は、湿地などに生育するアブラナ科の多年草。日本には、明治の初頭、在留外国人用の野菜として持ち込まれたのが始まり。現在では栽培用はもちろろん、全国各地に自生。山間の河川中流域にまで分布を伸ばしており、野生化・雑草化しているのも珍しくありません。北川湿原では、家田川上流と川坂川の支流「山の内谷川」で増えています。

食用のクレソンで馴染み深い植物ですが、ここでは厄介もの。ちぎれた茎でも水があれば簡単に根が出るほど繁殖力が旺盛で、生長が速く、汚れた水でも生育します。爆発的に増殖するので、希少植物を駆逐したり、小川をふさぐ恐れがあります。

【スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)】



正式名は「スクミリンゴガイ」。南米原産。在来種のタニシに比べて大きいことから一般に「ジャンボタニシ」と呼ばれています。1980年代に食用目的で日本に入り、養殖されていた時期もありましたが、採算が合わずに放棄されたり、養殖場から逃げ出したりして野生化。九州や西日本を中心に広がっています。繁殖力が強く、雑食性で水田の稲やハスの若葉を食べ、地域によっては被害が深刻化しているため、農林水産省が有害動物に指定。

逆にその爆食性を活かし、水田除草に利用できるのですが、役に立つ生物でもあります。北川湿原では、水田から流出した貝が希少植物のミスオオバコなどを食べ尽くし、植物が全く育たなくなった水路もあります。個体数をどのようにコントロールしていくかが、これからの課題となりそうです。